

からす組

仙台 62 万石の侍の中に、細谷十太夫という傑物がいる。身分は、50 石取り程度だから、それほど高くはないが、その人格高潔、惻隱の情の厚いこと、勇気があること、智謀の人であることなどなど、各地の勤務で、住民や無頼の連中からも慕われていた。

50 年以上前に、子母澤寛氏の著を読んで、維新のような激動の時代には、本物の人物が出現するものだ、と思った。この時代、奥羽地方の藩は、藩の維持のために、いわゆる官軍に降参するか、徹底的に抵抗するか、でどの藩も態度を決めかねていた。つまり、会津藩に殉ずるか、早くに抵抗を諦めるか。十太夫は、各藩の動きを探る役割をあたえられていたが、優柔不断な列藩の動きに呆れていた。そこで、無頼の連中や馬喰、ばくち打ちなどを糾合して、夜襲を専門とする一団を作り、それを率いていた。

官軍のなかから、「細谷鴉に十六ささげ。なけりゃ官軍高枕」と詠われるようになる。十六ささげとは、棚倉藩の優柔不断な態度に業を煮やした 16 人が脱藩して、からす組と同じような行動をとるようになったものをいう。官軍の隊長というのが、能力はないが、単に土佐藩出身だから、という程度の人間で、結局暗殺されてしまった。

からす組（鴉組、烏組）とは、いろいろな人々を集めて組を結成したとき、近所の子供が、巢から落ちた鴉の子を飼っていたのを譲ってもらい、この鴉が十太夫になつて、しかも 3 本脚だったので、瑞兆だ、と連れ歩いたため、からす組と呼ばれるようになった。・・・・（すでに述べたヤタガラスのことである。）

からす組の活躍はいくらかもあるのだが、最終的には仙台藩が官軍に降伏したため、現在でも、仙台でからす組の活躍を知らない人がほとんどのようである。

最後は、カラスも死に、主だった面々とも別れ、潜伏していたが、（当然ながら官軍と称する連中から憎まれ、市井の人々にかくまわれたり、網の手をかいくぐっていた）が、赦免があり、普通に歩けるようになった。西南戦争、さらには日清戦争にも参加したという。艶福家でもあり、多くの人々に慕われていた。

友人の結婚式に出席した時、仙台市に勤務していた人からからす組の話聞きこう

としたら、まったく知らなかったのが驚いた。仙台藩もだらしのないことで、それ以上の抵抗をしなかった。

会津をみろ！ 斗南の悲痛な生活、食うや食わずの生活で、日本人のなかで、最初に世界中に、その有能さと勇敢さで知られた柴五郎中佐も 5 歳の頃、斗南に行っていた。母も姉も幼い妹まで会津落城に際し自害した。新選組の齋藤一も斗南に行っていたらしいが、会津の悲劇は、日本人の記憶に残すべきであろう。

(特攻隊の大西瀧次郎は、滅びようとする会津に白虎隊がでたように、若い力が特攻をしたことに触れているが、それについては賛否両論があるだろう。)

柴五郎は、日本人として初めて全世界に、その勇敢さと高潔さで名を知られた人物である。義和団の変に際し、イギリス軍と共同で公使館などが集まっている一角をリーダーとして死守し、カーネル・シバとしてイギリス国王や他国の国王に面会をゆるされ、称賛を浴びたが、功を誇ることなく、イギリス兵の榮譽を称える謙虚な人柄でもあった。……「会津は少将どまり」といわれていたが、このときの活躍を世界中が知っている。さすがに、山縣有朋らの長州閥も我を張り切れず、大将で予備役に編入された。日露戦争には参加していない。

この維新の戦役で活躍した佐川官兵衛、新選組の齋藤一、などが西南戦争に警察隊として参加している。惜しい人たちを失ってしまったものである。

軍では、のちに日露戦争で黒溝台の難戦、ここを抜かれると日本軍は崩壊する。この闘いを生き抜いた立見尚文中将（桑名藩出身）など、いわゆる賊軍出身の有能な司令官や参謀や兵士が多く出現している。立見尚文は、弘前師団で生き残った人々は、冬の囲炉裏端で孫たちに語るのは、このときの難戦であり、この人（立見尚文のこと）がいたからこそ、生きて帰ることができた、と締めくくり、軍神と称された。日露戦争の 2 年後に病を得て亡くなったが、「わしは、黒溝台で死ぬべきところ、不思議に生き永らえた。」

ロシア軍の半数の 10 個軍団、10 万人（日本軍とほぼ同数）が日本軍の最左翼の秋山好古少将が守備する旅団に攻勢をかけてきた。「わしはともかく、秋山はあのとき、どんな顔で防戦していたのだろう」、と秋山少将を称賛し、かつ不思議がり、かつ正直に他人に語ったという。……こういう賊軍の有能な人材を使いこなせなかった政府は、やはり無能というしかない。

